

## A. 聖書解釈と政治思想

## オリエンテーション

## 導入：脳神経科学とキリスト教

## 1. 聖書の政治思想とキリスト教社会主義

## 2. 現代政治思想とキリスト教

2-1：民主主義とキリスト教

2-2：政治的なもの——アーレント、ムフ

7/1

2-3：シュミットからアガンベンへ

7/8

2-4：ジジエクとパウロ

7/15

## Exkurs

現代キリスト教思想とユダヤ的なもの

キリスト教と科学技術

7/22

## &lt;前回&gt;現代キリスト教思想とユダヤ的なもの(1)

## 1. アウシュヴィッツの衝撃

この現実がなかったかのように、神学的思索を行うことはできない。

キリスト教神学の現状と問いとしてのユダヤ的なもの

「神学界でアウシュヴィッツ以後の神学が検討され始めるのは、概括的に言えば、ドイツでは、哲学者アドルノの「アウシュヴィッツの後で詩を書くことは野蛮である」(『ミニア・モラリア』)との指摘から一〇年、一九六〇年代からで、H・ゴルヴィッツァーと共に、E・ベートゲやF・W・マルクヴァルト、B・クラッパートらが参加した。このグループの場合は、主に「罪責告白」の視点からの接近と言える。他方、一九六〇年代後半以降、「神」概念の検討をも含む、この神学の取り組みが積極的に試みされてきたのは、ユダヤ人の多く居住するアメリカにおいてであった、「ヴィーゼルの小説『夜』」、「これらの神学者の応答は、「神はどこにいたか」(神義論的問い)と「人間はどこにいたか」(罪責問題的問い)という二つの問いに分化されると言える。」(金子啓一「第三章 神と現代人(2)——アウシュヴィッツ・ヒロシマと現代神学」、野呂芳男・熊澤義宣編『総説現代神学』日本基督教団出版局、1995年、332頁)

↓

## 2. ユダヤ教との歴史的関係の再考

反ユダヤ主義に対するキリスト教の責任

## (1) 新約聖書学—イエス、パウロ、その後—

## &lt;争点&gt;

3. マタイによる福音書 27章 15-25節

4. ローマの信徒への手紙 11章 25-33節

6. ジョン・ドミニク・クロッサン『イエスとは誰か——史的イエスに関する疑問に答える』新教出版社、2013年。

「この段階では反ユダヤ主義ともユダヤ人差別とも言えません」、「そのヨハネにしてもユダヤ人と非ユダヤ人を区別していたとは思えません」、「ところが四世紀にローマ帝国がキリスト教を国教にしたとき、まさにあの磔刑物語がキリスト教徒にユダヤ人を責め立てる口実を与えてしまい、ヨーロッパの命取りになる恐ろしいホロコースト時代を準備する長い歴史が始まります。」(141)

7. ジョン・ドミニク・クロッサン『誰がイエスを殺したのか——反ユダヤ主義の起源とイエスの死』青土社、2001年。

「キリスト教は、ユダヤ教内部の一セクトとして誕生した。そしてある地域ではゆっくり

と、他の地域では急速に拡大し、最終的には新たなひとつの宗教として独立した。もしこれが、最後まで宗教のレベルに於いて行なわれていたならば、双方の非難と侮辱は全く無害なものに終始していただろう。だが、四世紀にキリスト教がローマ帝国の国教となり、キリスト教ヨーロッパが誕生すると、反ユダヤ主義は単なる神学的論争から、致命的なものへと変貌した。これらの受難＝復活物語が、基督教の支配する世界で語られたらどうなるか考えていただきたい。これらの物語こそが、特定の人々を虐殺に駆り立てたのでなかったのか。」(14-15)

8. 新しいパウロ解釈：1980年代以降

9. 現代思想におけるパウロ → バディウ、アガンベン、ジジェク

10. Rosemary Radford Ruether, *To Change the World. Christology and Cultural Criticism*, SCM Press, 1981.

11. Richard A. Horsley (ed.), *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press International, 2004.

Introduction (Richard A. Horsley)

12. ユダヤ思想からのパウロ論：

Jacob Taubes, *Die politische Theologie des Paulus*, Wilhelm Fink Verlag, 1993. (ヤーコブ・タウベス『パウロの政治神学』高橋哲哉・清水一浩訳、岩波書店、2010年。)

(2) キリスト教史における反ユダヤ主義

<ユダヤ人やユダヤ人の運命：古代から中世へ>

<反ユダヤ主義の源泉・前提>

<近代世界とユダヤ人>

24. シオニズムとナチズム

ハスカラーの帰結。啓蒙的近代における宗教的寛容(政教分離)を背景としたユダヤ人解放＝キリスト教世界への同化。1860年代～70年代にかけて、西欧諸国では、法的レベルにおいて完了。

↓

新しいユダヤ人への差別＝反ユダヤ主義(反セミティズム、1875年の造語)

古代・中世：ユダヤ人憎悪は厳しいが、ユダヤ人もキリスト教に改宗すれば救われるというのが原則。

新しい反ユダヤ主義：ユダヤ人は「セム人種」であること自体において、アーリア系キリスト教世界にとって危険な存在である。血と文明を墮落させ、破壊する劣悪人種。

↓

生存の道は、パレスチナに帰還し国家を建設するにかない(シオニズム)。

ナチズムによる強制収容所・大虐殺。

(3) 反ユダヤ主義の深層・真相

25. 国民国家の否定的条件としてのユダヤ人

「「国民」とはある国家の正統な構成員の総体」、「近代社会における国民主権論と民主主義観念の広まりを前提すれば、国民とはその国の政治の基礎的な担い手」、「必ずしもエスニックな同質性をもつとは限らない」(塩川、7頁)

「距離が近くなればなるほど、境界を保つために差異化はより強く作用する」、「異質性よりも同質性の方がかえって差別の原因になりやすい傾向」(小坂井、21頁)

↓

国民国家における国民としての同化が差別(差異化)を強化した。キリスト教的伝統はその際に、正当化の論理を提供した。

26. 反ユダヤ主義はキリスト教自身の歪曲を伴った。ナチズムはドイツ的キリスト教というキリスト教の変質形態を発生させた。
27. 「ラカンの言うとおりに、「ユダヤ人と非ユダヤ人」という対立は現実的な世界から導き出されたものではない。そうではなく、「ユダヤ人と非ユダヤ人」という対立の方が、「現実の世界に骨組みと軸と構造を与え、現実の世界を組織化し、人間にとって現実を存在させ」たのである」（内田樹『私家版・ユダヤ文化論』文藝春秋、2006年、55頁）。

## Exkurs

### 現代キリスト教思想とユダヤ的なもの(2)

#### 1. アウシュヴィッツ以後の神学

##### ・ユダヤ教との問いの共有

神義論、神は実はできたのにしなかったのか（全能性を保持しつつ正義性を問う）。

弱き神と人間の責任（正義性・善性を保持しつつ全能性を問う）

ヨナス、モルトマン、ホワイトヘッド、ヴェイユ

##### ・ユダヤ神秘主義

##### ・現代科学：創発性の議論、全体論的概念としての神

宇宙論あるいは創造論と神

#### 2. Hans Jonas, *Gedanken über Gott*, Suhrkamp, 1994.

"Der Gottesbegriff nach Auschwitz. Eine jüdische Stimme (1984)"

"Materie, Geist und Schöpfung. Kosmologischer Befund und kosmogonische Vermutung(1988)"

### (1) 神義論から弱き神へ

#### 1. 悪論：どんな悪を念頭に置くのか。ライプニッツ『弁神論』

##### ・悪の实在の現実、最善なる神が創造した最善の世界。

悪はその世界の内部でより大きな善のためにのみ許容され存在する

悪の現実の消極的理由、予定調和

##### ・自然的な悪（苦痛）、道徳的な悪（罪）、形而上学的な悪（不完全性）

欠如としての悪

完全化の過程における悪

#### 2. 神義論（弁神論）

##### ・何が求められているのか、何を求めて神義論を問うのか。

理論的な理由づけ・説明が問題なのか、あるいは過去への回帰か

慰め・癒やしとは？

関係の回復、見出された意味

##### ・全能性を弱めることは可能か

ホワイトヘッド、ヴェイユ、ヨナス、シェーラー、ハイデッガー、ヴァッティモ

#### 3. ヨーナス『アウシュヴィッツ以後の神』

「無関心な死んだ永遠ではなく、時とともに積み重なる実りによって成長していく永遠」

「苦しみ、生成する神」「気づかう神」(18)、「この身にリスクを抱えた神」(19)

「この神は全能の神ではありません」、「全能の力とは自己矛盾、自己否定、無意味な概念」(20)

「〈力〉とは関係概念であって、複数の極からなる関係を必要とします。だとすれば、相手のなかの抵抗と出会わない力は、およそ力がないの同然です。力は力をもつ相手と関わることで発揮されます」(21)

「神の全能は絶対で無限であるという考えについては、このように論理的存在論的な異論があります」、「神の全能と神の善性とを両立させるとすれば、それとひきかえに、神をまったく測りがたきものに、つまりは謎にせざるをえません」(22)

「完全な善と全能とを神に帰するとすれば、神はまさに完全に隠れた、理解できないものであらざるをえないでしょう」(23)

「神は理解可能で善であり、それにもかかわらず、世界には災いが存在する、と」、「私たちは全能の概念を疑わしいと認めたのですから、消し去らなくてはならないのはこの属性です」(24)

↓

「神の力を限定されたものとみなすべきだ」「神の側からの譲歩」(24)

「神は沈黙しました」、「神はそれを欲したからではなくて、そうできなかったから、介入しなかったのだ、と」(25)

「神が力を断念したのは、ひとえに人間の自由をゆるすためです」(26)

「ルリアのカバラのなかの宇宙論の中心概念であるツィムツム (Zimzum) の考え」「収縮、退却、自己制限」(27)

「神にはもはや与えるべきものはありません。いまや、人間のほうが神に与えなくてはなりません」(28)

「神的な冒険の運命は私たちの移り気な手のうちに、つまりどう形容するにしても万有のなかのこの地上の片隅にゆだねられており、それに応える責任が私たちの肩にかかっている」、「創造の意図を無にしてしまうこともまた、私たちの手中にあることは疑いえない」(105)、「宇宙規模でなされた実験」(106)

「エティ・ヒレスムが遺した日記」「一九四三年に彼女はアウシュヴィッツでガスによって殺された」、「神が私をこれ以上助けられないなら、私が神を助けなければならない。・・・私はできるかぎり助けるようにいつも努めよう」(107)

## (2) 宇宙論と神、創発主義

### 4. ヨーナス「物質、精神、創造」

「諸段階の信仰を創造した根拠への問い、すなわち神の問いをとりあげる」(58)

「進歩の原理」「無秩序から秩序へ」「低次のものから高次のものへ」「エントロピーの増大に反するその方向性は、まさしく謎にほかならない。世界を作る質料のなかにそもそののはじまりからプログラミングが内在していて、それによって高次の秩序に進む生成が操舵されているのだ」、「宇宙生成のロゴス」(59)

「自分自身を超えていくためには、一步踏み出し、新しいものへ通じていく超越する契機が必要である」(60)

「秘密にみちたもの」「物理的なものを超越するもの、非物質的なものにたどりつく。主観性ないし内面性は、存在論的には素材のなかに本質的に含まれている所与である。」  
「主観性が生の領域に、有機体の領域に相即して登場してきたことは経験的事実である。」(65)

「延長と意識」「たんに並存しているのではなく、相互に依存し、相互に働きあっている」(66)

「創造主の当初の意志」(70)、「傾向、あこがれ」、「主観という存在は自分に与えられた存在である」、「生とは自己目的である。すなわち、能動的でみずから意欲し、追求する目的である。目的をもつということは熱意をこめて自分自身を「然り」と肯定し、それによって、どうあってもかまわないような無目的なものを無限に圧倒することであり、そうであればこそ目的をもつ側は目的としてみなされうる。」(71)

「因果性の概念のなかに、目的因が引き入れなくてはならないということである。」(72)  
 「生命という現にある証拠」「それはともあれ内在が自分自身について語りだした声なのである。」(73)

「超越の地平」「自然」を超越していく自由をもち、この自由のなかに超越の地平が示される。」(74)、「精神だけが有する独自の領域、人間が動物を超越しているしるしである。第一の自由では、目下に迫られた主題に束縛されなくてもすむようになる」、「第二の自由では」「あらかじめプログラミングされた反応行動を必ずしなくてもすむようになる」、「第三の自由では」「実践理性の領域を含んでいる」(75)、「見出されたものを超えて無制約者を考え出し、みずから進んでその無制約者とその要請によってわれとわが身を束縛することができるということにほかならない。」(75-76)

「反省する自由」「内在的超越」の傑出した様態」(77)

「精神を可能にする条件」「それは生を可能にする条件や主観性を可能にする条件を超えたものである」、「物質とは初めから眠れる精神である」、「眠れる精神の現実の第一原因、眠れる精神を創造する原因ただ覚醒した精神でしかありえないからである」(88)、「散在的名キナ精神の原因は顕在的な精神である」、「原因がただひとつであるとすれば、第一原因であり、複数の原因であるとすれば、協同して働く原因である。」(89)

「物質はそのただなかに精神が出現し、その後働くようになる余地をゆるした」(91)

「ヘーゲル」「ライプニッツやホワイトヘッドのような過程について思索した近現代の他の論者に似ている」「度量が広いが楽天主義的」、「アウシュヴィッツ」(102)

「精神が元初において行なった自己放棄ははるかに真剣だった」、「神的なものは自分お力を放棄しなければならなかった。」(103)

「ひたすら蓋然性の支配にゆだねられたなかで、精神がいつかどこかにで現われる機会を提供できるのは、空間時間的に巨大な宇宙のみである。」「生を喜ぶ神」「生を望む神」(104)

「創造の意図を無にしまうこともまた、私たちの手中にあることは疑いえない。」(105)

「私たちは今や私たちによって脅かされつつある世界のなかの神的なことがらを私たちの手から守らなくてはならない。私たちにたいしてそれ自身では無力な神的なものを助けなくてはならない、と。これは知の力をもつよえの義務」「宇宙的義務」、「私たちが私たちの手で挫折させてしまうことができ、私たちのなかで台無しにしてしまうことのできるものは、宇宙的規模でなされた実験にほかならないからだ。」(106)

「エティ・ヒレスム」「肝心なことはひとつのことです。私たちのなかにあるあなたの一部を救うこと、神よ。」(107)

「私たちが支配しているこの地上における精神の運命にたいしては、つまり私たちの力の及ぶただひとつの管轄地域にたいしては、ひとり私たちのみが責任をもっているのである」(116)、「私たちの地球を世話しよう。よそで何が起ころうとも、私たちの運命はおの地上で決せされる。」(117)

## 5. 非還元主義。強い創発主義と弱い創発主義との区別。

創発性の定義と思想的背景：西洋の自然哲学の伝統

アリストテレス、プロティノス、そしてヘーゲル

強い創発性と弱い創発性

弱い自然主義・非還元論的自然主義

・実在の諸領域を横断した議論の魅力：

・ティリッヒ

次元論：システムは、先行するシステムの創発的な秩序として生成する（創発性）

人間存在（生）において、こうして生成した諸次元が統合されている

人間は多くのシステムの複合体(システムではない)

生命システム → 心的システム → 社会システム

物質・無機的 有機体・生命 心 精神 歴史

物質／生命／心／精神（社会・文化）

道徳・宗教

諸次元の自律性と生成、そして統合性

・デイヴィス、人間の実在について、基体は一つであっても、多様な諸形態を認める（多元的実在論もあり得る）。広範な実在領域の境界における議論を行っている点が魅力的、しかし、この問題領域に専門家にとってはうさんくさい。

科学者における大胆な議論。しかし、その多くは実質的には従来からある説の焼き直しにすぎない、思想研究の素人の議論。思想研究も自然科学研究に勝るとも劣らぬ専門性があり、専門以外の問題領域については、十分な研究が必要であり、発言は謙虚であるべき。最悪の例の一つが、ドーキンズ。

・全体論＋進化論

・神とは何か？

## 6. 創発性と生命

清水。物質から化学進化、そして生命というシナリオ。非平衡の熱力学・非線型的な複雑系の物理学。

## 7. 創発性と心

・クレイトン：

・ルーマン：オートポイエーシスと心脳問題

・オートポイエーシス

・マトゥーラとヴァレラによって、生命体に妥当する組織原理として導入（生命システム）システムは自らの働きによって自身の組織を継続的に産出する。

細胞は閉鎖的システム（一つの作用する統一体）であり、それによって環境との接触（エネルギーや物質の交換、開放性）を行いうる。細胞は環境との交換を自ら制御する。閉鎖性と開放性とは相互補完的な関係にある。オートポイエーシスのシステムは自律的（Autonomie）ではあるが、自足的（Autarkie）ではない。

・神経システムは、ニューロンの自己関係的なネットワークである。

ニューロンの活動は先行するニューロンの活動に対する反作用。

脳は閉鎖的な自己参照的システム（飛行内部の飛行士）。

脳は感覚器官によって外界と接触するのではない。感覚器官は外界の出来事をニューロンの活動に転換する（内と外には一義的な相関関係はない）。

知覚は外部世界をそのままに映し出したものではなく、システムの外部にある世界をシステム内部で構成したもの。

・自己参照性（自己関係・自己準拠） → 次元の独立性

キルケゴール

閉鎖性に基づく開放性

↓

・一般化：心的システム、社会システム

心的システムの要素は、思考内容、表象

・意識・心は、思考内容から思考内容へ、表象から表象への連鎖

自らの活動を通して表象を継続的に産出して行く

・物質的・エネルギー的な下部構造を土台にしている。環境からの寄与なしに自力で存

立しているわけではない。しかし、システムの統一性と諸要素は、システム自身が産出する

意識は脳の活動に依存しているが、脳・脳波・脳細胞活動と同一ではない。脳の活動は思考内容ではない・脳は思考しない。脳は意識の環境である。ニューロンの活動が思考・表象に転換される。

- ・構造的カップリング(strukuelle Kopplung)：システム間の依存／非依存

脳と意識とは別々に働くが互いに依存しあっている

志向性は脳に還元できない（心の哲学の問題）。

- ・脳科学の意義あるいは限界

心のシステムのオートポイエシスと構造的カップリング

脳は心の実在的な基盤であるが（還元主義の一面の真理）、心は脳を含めたより広範な有機体組織の全体論的現象である。宗教論は脳科学の成果に依拠しそれを包括するが、脳科学に還元されない。

↓

科学と宗教との対話とはどのような仕方で遂行されるか。

対話の非対称性

- ・社会の構成要素は人間ではなく、コミュニケーションである。可能なコミュニケーションの全体としての社会。人間は社会システムの環境である。
- ・意識とコミュニケーションとは構造的にカップリングしている。

他者の心は直接経験できない。意識内容（思考・表象）がコミュニケーションへ（例えば発話）と転換されることによって、間接的に接触する。コミュニケーションはそれに参加している人格の意識システムがそれぞれの瞬間に何を考えているかについて情報を与えるものではない。コミュニケーションと意識とが分離しているからこそ、より大きな独立と自由が可能になる。

- 8. 神と実在の全体性——超越あるいは深み

自然主義的な神論の可能性＝伝統的神論の転換

時間的な神、神と世界の相互性

自己超越性と超越性

- 9. 創発主義によって、自然主義と宗教との対立図式を乗り越える試み。

伝統的な神理解の側に大きな変更を要求する。

「それは神、すなわち創造主という考えを余計のものとするが、この特別な物理的宇宙の一部として存在する普遍的な心、超自然的でない自然的な神を否定するものではない。」（デイヴィス、300）

「物理的全宇宙は、自然的な神の心を表すための媒体である。この意味において、神は最高の全体論的概念であり、人の心をおそらくははるかに越えたレベルの概念である。」（同書、301）

#### <参考文献>

1. 高坂史朗編『悪の問題——現代を思索するために』昭和堂。
2. 酒井潔／佐々木能章編『ライプニッツを学ぶ人のために』世界思想社。
3. A・プランティンガ『神と自由と悪と——宗教の合理的受容可能性』勁草書房。
4. シェリング『人間的自由の本質』岩波文庫。
5. リクール『悪のシンボリズム』溪声社。  
『人間、この過ちやすきもの』以文社。
6. ハンス・ヨーナス『アウシュヴィッツ以後の神』法政大学出版局。

7. 芦名定道「脳科学は宗教哲学に何をもたらしたか」  
 (芦名定道・星川啓慈編『脳科学は宗教を解明できるか?』春秋社、2012年。)  
 芦名定道「ティリッヒ——生の次元論と科学の問題」(現代キリスト教思想研究会『ティリッヒ研究』創刊号、2000年、1-16頁)。
8. Niklas Luhman, *Funktion der Religion*, Frankfurt a. M. 1977.  
 (『宗教社会学 宗教の機能』新泉社。)  
 , *Gesellschaftsstruktur und Semantik. Bd.2*, Frankfurt a.M. 1981.  
 , *Society, Meaning, Religion. Based on Self-Reference*, in: *Sociological Analysis* 46, 1985.  
 , *The Autopoiesis of Social System*, in: Felix Geyer / Johannes van der Ziuwen (ed.), *Sociocybernetic Padadoxes*, London 1986.  
 『システム理論のパラダイム転換』お茶の水書房、『自己言及性について』国文社、『宗教論』法政大学出版局、など。
9. Georg Kneer, Armin Nassehi, *Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme*, W. Fink, 1993 (2000). (クニール/ナセヒ 『ルーマン 社会システム理論』新泉社。)
10. Paul Davies, *God and the New Physics*, J.M.Dent & Sons, 1983. (P.C.W.デイヴィス『宇宙はなぜあるのか——新しい物理学と神』岩波書店。)
11. Philip Clayton, *Mind and Emergence. From Quantum to Consciousness*, Oxford University Press, 2004.
12. Philip Clayton and Paul Davies (eds.), *The Re-Emergence of Emergence. The Emergenist Hypothesis from Science to Religion*, Oxford University Press, 2006.
13. 清水博『生命を捉え直す 生きている状態とは何か』(増補版) 中公新書、1990年。  
 清水博「生命科学と宗教」(『宗教とは』(岩波講座転換期における人間9) 岩波書店、1990年)
14. ジョン・ヒック『人はいかにして神と出会うか——宗教多元主義から脳科学への応答』法藏館、2011年。(John Hick, *The New Frontier of Religion and Science: Religious Experience, Neuroscence and the Transcendent*, Palgrave, 2006.)
15. U・マトゥラーナ、F・バレーラ『知恵の樹』ちくま学術文庫、1997(1987)年。